



雪害対策や樹氷 科学的に考える

山形で気象講演会

科学的見地から豪雪被害への対策を考える気象講演会「科学からみる雪害対策と樹氷今昔」が31日、山形

雪氷防災研究について話す阿部修さん

山形市・文翔館

市の文翔館で開かれた。

防災科学技術研究所雪氷防災研究センター新庄支所長の阿

部修さんが「雪氷防災研究の最前線」、山形大理学部教授の柳沢文孝さんは「アイスモンスタ―100歳、樹氷140歳」をテーマにそれぞれ講演した。

阿部さんは「雪氷災害の発生を予測するには、雪の量だけではなく雪質や雪の密度が重要になる」とした上で、積雪内部で下層の温度が高く上層が低い場合にできる「しもやめ雪」に着目。「しもやめ雪が要因の表層雪崩については予測可能になった。春先に多く発生する全層雪崩に関しても研究を進めている」と述べた。続いて柳沢さんが講演し、本県・蔵王の樹氷

について、発見のいきさつや分布範囲が縮小していることなどを解説した。

講演会は日本気象学会東北支部(支部長・川津拓幸 仙台管区気象台長)が主催し、東北6県持ち回りで毎年開催している。